

# ヒロシマ音楽譜

作品が紡ぐ復興

⑤

1974年、被爆30年 た曲は1500曲、多数を前に一つの音楽祭が始の映画や舞台出演もこなまった。その後20年にわすなど、戦後華やかさをたつて開催され、平和を増していった日本歌謡界

## 美空ひばり

テーマとする数多くの音楽作品を生み出した広島平和音楽祭である。その第1回の音楽祭で生まれたのが、美空ひばり(37

89年)の「一本の鉛筆」。音楽祭の演出を手がけた松山善三が作詞し、佐藤勝が作曲した。

美空といえは、デビュー直後から天才少女歌手として脚光を浴び、豪華な衣装や世間にこびない言動などでも注目を集めてきた。52歳で世を去るまでにレコーディングし

# 8.6 日常に重ね歌う

の象徴的存在といえる。

あまり語られることは

ないが、美空は8歳の時、

横浜で大空襲に遭って

る。父親が戦地に赴いて

不在の折、姉弟たちと

もに母親に手を引かれ、

防空壕で難を逃れた。一

う。「歌にくい」とい

睡もしなかつたというそ

の晩の光景は、彼女の脳

裏から消え去ることがな

かつたであろう。

その芸能生活は派手や

かで非日常的だが、実は

彼女の歌う「一本の鉛筆」

こそ、反戦・平和をそれ

までにならないほど身近に歌

った曲ではないかと思

われるが、それは「歌う」

のではなく「語る」ため

らで、歌詞にもあるよう

に、目の前の「あなたに



1988年の第15回広島平和音楽祭で歌う美空ひばり。「一本の鉛筆」などを熱唱した

## 反戦の思い語るように

きいてもらいたい」のである。

身近さは後半部分にも表れる。「一本の鉛筆があれば、あなたへの愛を書く」「一枚のザラ紙があれば、子供が欲しいと書く」ことは、誰の日常にあつてもおかしくない。だがその後には「あなたをかえして」「八月六日の朝と書く」と続く。日常の中にと「八月六日」の出来事が紛れ込むかのようだ。

曲ができたのは本番のわずか3日前。身内の不祥事などでマスコミを沸かせる騒動が相次いでいた中、ライブ映像に残された美空の歌は、8月6日を身近に、日常の中で考えるかのよう、静かな語りかけで始まった。「人間のいのちと私は書く」。曲はそう結ばれる。(広島大特任助教・能登原由美)